

グループホームでの生活継続を希望する高齢知的障害者への支援に関する研究 ーグループホーム職員へのインタビュー調査からー

○ 社会福祉法人かすみが丘学園 氏名 牧田 芙弓 (010458)

藤野 真凜 (福井県立大学・9631)

キーワード3つ：高齢知的障害者・グループホーム・住まいの場の選択

1. 研究目的

これまで知的障害者の高齢化について、主に障害者支援施設やグループホーム（以下、GH）において指摘がなされてきた。特に障害者支援施設においては、具体的な支援内容を中心とした実践報告が散見されている。GHにおいても高齢知的障害者に関する研究はいくつかみられるが、量的調査による回答をもとに検討された研究（相馬ら 2016）や実践報告等に限定されているのが現状である。一方で、障害者の権利に関する条約（以下、障害者権利条約）において、「どこで誰と生活するかを選択する機会を有すること並びに特定の生活施設で生活する義務を負わないこと」と明言されていることから、支援者は高齢知的障害者が希望する住まいでのその人らしい生活を支援する必要がある。その中では、当然 GH での生活を継続したいという思いにも対応していくことができる環境整備が求められる。つまり、事例の経過と合わせた詳細な支援内容の聞き取りや検討を行っていくことが必要と考えられた。

以上を踏まえ、本研究の目的を2点に据えた。1点目は、高齢知的障害者がGHで暮らし続ける上での課題をGH職員がどのように認識しているのか具体化することである。2点目は、GHで暮らし続けたいとの希望を持つ高齢知的障害者に対して、GHで暮らし続けるために実際にどのような支援や配慮が行われているかを明らかにすることである。この2点を踏まえて、高齢知的障害者がGHで暮らし続けるために必要な支援について考察する。以上のことを検討することで、GHで暮らす高齢知的障害者が住まいの場を自由に選択するための一助となると考える。

2. 研究の視点および方法

研究デザインは、質的研究法を用いる。GHで高齢知的障害者の支援にたずさわっているまたはたずさわっていた経験のある職員（学生アルバイトを除く）19名を対象とし、個別の半構造化インタビューを行い、高齢知的障害者がグループホームで暮らし続ける上で生じる課題や行っている支援・配慮について聞き取りを行った。19名の職員から聞き取った32名の高齢知的障害者の事例を本報告の分析対象とした。

分析には、質的内容分析を用いた。逐語録のデータからコードを抽出し、類似するコードをグループに分けて、サブカテゴリー、カテゴリーの生成を行った。

3. 倫理的配慮

本調査は、福井県立大学人を対象とする研究等における人権擁護・倫理委員会の審査を経て、承

認を得ている（承認番号 S2024010）。また、調査対象者には、予測される利益及び不利益、研究参加の自由意思、個人情報保護等の項目について説明を行い、書面にて同意を得た。なお、開示すべき COI はない。

4. 研究結果

高齢知的障害者が GH の継続利用するにあたって、課題と支援・配慮に分けて分析した結果、各々【健康面・身体機能面】【生活全般】【余暇支援】【社会資源】【他の GH 入居者との人間関係】【職員体制】【連携・つながり】【ハード面・設備面】【日々のかかわり】に分類することができた。とりわけ高齢に起因する疾患への対応や、介護保険の併給という高齢知的障害者ならではの課題や支援内容が見られた一方で、本人の強みを活かした自立支援や傾聴といった高齢に限らない支援も並行して行われているケースが多かった。加えて、障害特性により将来の暮らしをイメージすることが難しいこと等から、日々のかかわりの中で今後の居住の場について確認するといった工夫も行われていた。

5. 考察

分析結果を踏まえ、知的障害者が住まいの場を選択し、GH で暮らし続けるために必要な支援として以下のように考察した。

- ①意思決定に関する支援については、日常生活の中の小さな決定を積み重ねつつ、大きな決定を行うための経験等を蓄積できるような支援が必要である。
- ②GH 内の支援にとどまらず、様々な社会資源・制度の活用を行い、本人を中心に据えながら関係機関等と連携しつつ支援を行っていくことが必要である。また、必要な社会資源（インフォーマルなものも含む）を開拓していく働きかけも重要である。
- ③高齢知的障害者には、経験の蓄積があるため、本人のストレングスに着目しつつ支援を行っていくことが必要となる。
- ④一人の人として障害特性に配慮しつつかわり、年齢で区切らない連続した支援が必要とされる。

本研究の限界は、高齢知的障害者本人の視点が含まれないことにある。本人が年齢を重ねていくことをどのように捉えているのか、どのような支援を必要としているのかについての検討は今後の課題としてい。

参考文献

相馬大祐・古川慎治・湯浅智代・伊藤省吾・志賀利一（2016）「グループホームで生活する高齢知的障害者に関する研究」『国立のぞみの園紀要』（9）33-41.